

難波津高麗橋説批判

その他のタイトル	Criticism for the theory to assume Naniwa-du port near Kouraibashi
著者	西本 昌弘
雑誌名	關西大學文學論集
巻	70
号	4
ページ	A27-A45
発行年	2021-03-18
URL	http://doi.org/10.32286/00023094

難波津高麗橋説批判

西 本 昌 弘

難波津は古代のヤマト政権が大坂湾岸地域に設けた外港である。五世紀以降、中国や朝鮮諸国に派遣される外航船は難波津を出発し、外国使節の大型船も難波津に到着した。その難波津の近傍には、難波館・三韓館などと総称される隋・唐・高句麗・百濟・新羅の客館が存在した。^①これらの客館は外国使節の宿泊施設として利用されたもので、中には唐風に改称して鴻臚館と呼ばれるようになった。

難波津や客館の位置をめぐっては、古くから議論が続けられており、近年では考古学的な発掘調査成果を勘案して、天神橋付近や高麗橋付近に難波津を比定する説が有力視されている。高麗橋説の背景には、大阪市中央区に残る高麗橋という地名（橋名）が、古代の高麗館（高句麗使のための客館）を連想させるといふ認識があるようであるが、そのような理解は本当に正しいのであろうか。

本稿では、高麗橋説を提唱した日下雅義氏の論拠を逐一検証しながら、高麗橋説の問題点を明らかにしたい。また、高麗橋という名称の由来を考えるため、豊臣秀吉の朝鮮出兵（高麗陣）に際して、朝鮮（高麗）から連行された民間人捕虜（被虜人）の実相についても言及する。

一 難波津高麗橋説の論拠とその問題点

難波津を高麗橋付近に比定する説は日下雅義氏によって唱えられたものである。日下氏は一九八三年に「古代の『住吉津』について」（『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』）、一九八五年に「摂河泉における古代の港と背後の交通路について」（『古代学研究』一〇七）と「古代における『住吉津』付近の地形」（『すみのえ』一七七）、一九八七年に「古代『難波津』の位置をめぐって」（『立命館文学』四七九）、一九九〇年に「古代の大坂港」（『大阪春秋』六一）などを相次いで発表して、古代の難波津は東横堀川に沿う高麗橋付近に存在したと論じた。これら大阪湾内の古代港津に関する一連の研究は、一九九一年に『古代景観の復元』（中央公論社）と題する一書にまとめられている。^②この著書によりながら、日下氏の難波津高麗橋説の論拠をまとめると、以下のようになる。

- ① 古代の港はラグーンや河口部に成立することが多かった。難波津・住吉津・熟田津などはラグーンの港の代表例である（一七五頁）。
- ② 東横堀川にかかる高麗橋付近に厚さ二〜三メートルのシルト層が存在するが、このシルト層は二つの砂州の間に形成されたラグーンの底にたまったものと解される（二二四〜二二五頁）。
- ③ 『日本書紀』仁徳二二年正月条に「押照る 難波の崎の 並び浜 並べむとこそ その子は有りけめ」と詠まれているが、「並び浜」は上町台地の先端に立って眺められた景、すなわち砂州とそれに挟まれたラグーンが、何本かの筋のようになって横たわっている様子を歌ったものと解すべきである（二二五頁）。
- ④ 『日本書紀』推古一六年六月条や舒明四年一〇月条には、隋使や唐使が難波津に到着した記事がみえるが、これについては、直木孝次郎説に従い、江口↓堀江↓難波津と進んだと解釈し、江口を堂島川にかかる玉江橋付近に比

定すれば、難波津は高麗橋付近にあったとみて問題ない（二二六～二二七頁）。

⑤ 「難波往古図」（河州雲荃寺什物）では、「船場」という字のそばに「難波湊」と明記されており、そこは高麗橋の場所と一致する（二二八～二三〇頁）。

⑥ 高麗橋に近い北浜の三越百貨店の地下から単弁八葉蓮華紋瓦片、蛸壺形素焼小壺が出土し、高麗橋一丁目、島町一丁目、道修町一丁目などの地下から韓式系土器、奈良三彩小壺、皇朝十二銭、重圈文軒平瓦などが出土している（二二二～二三三頁）。

⑦ 七世紀後半において難波で唯一の寺だったとされる阿曇寺は、高麗橋一丁目付近に建立されていたとする吉田靖雄説が有力である（二三三頁）。

⑧ 高麗橋という名が朝鮮半島との関係でつけられたことはほぼまちがいない（藪内吉彦説）（二三三頁）。

以上のような論拠をあげながら、日下氏は五～六世紀に難波堀江が完成したのち、国際港「難波津」は現在の高麗橋付近に定着したと結論づけた（二一九頁、二三四頁）

日下氏の高麗橋説が出されるまで、古くから有力視されていたのは、難波津を三津寺町付近に比定する説であり、一九七〇年代に千田稔氏の論考が公刊されると、三津寺町説がさらに通説の地位を固めるようになった。しかし、日下説の発表後、いち早く直木孝次郎氏がこれを支持したこともあって、高麗橋説が一躍注目されるようになり、三津寺町説の有位を覆すことになった。現在では考古学者を中心として、高麗橋説の方が通説とみなされるようになってきている。

しかし、日下氏が提示した前述のような論拠はいずれも不確実なものであり、高麗橋説は十分に論証された学説であるとは認めがたい。以下、日下説の論拠を一つずつ検証することにした。

- ①はラグーンに難波津などの要港が発達するという一般論であり、これについては異論はない。
- ②の高麗橋付近にラグーンが存在したことについては、木原克司氏が否定的な意見を述べているが、二〇一四年における趙哲濟氏らの地形復原では、高麗橋付近にラグーンの存在が認められているので、これもとくに異論をさしはさむ必要はない。ただし、趙氏らの地形復原では、七世紀以降の古代には三津寺町付近にもラグーンが形成されていたことが想定されているので（後述）、ラグーンの存在から高麗橋説のみが有利であるということとはできない。
- ③の「並び浜」の解釈については、足利健亮氏の批判がある。足利氏は仁徳紀のこの歌から、はたして砂州と水域の交互配列の情景が読みとれると言い切れるのかと疑問を呈している。奈良時代には、二つの同一規模の倉を並べて建て、共通の屋根をつけたものを並倉・双倉と称した（『日本国語大辞典』）。こうした用法を参照すると、同一規模の浜が隣接して並ぶ情景を「並び浜」と呼んだ可能性もある。かりに日下説を認めるとしても、砂州と砂州に挟まれたラグーンは古代には三津寺町付近にも形成されていた。趙哲濟氏らは仁徳紀の「並び浜」を彷彿とさせる海浜の地層を、大阪市浪速区の恵美須町遺跡で発掘したと述べている。したがって、「難波の崎の並び浜」という表現をもって、高麗橋説の論拠とすることは適当とは思われない。
- ④推古一六年六月条や舒明四年一〇月条にみえる外国使節船を迎接した江口は、これまで一般的に考えられてきたような淀川河口部における陸上の一地点ではなく、淀川が難波海（大阪湾）に注ぎ込む河口付近の海上の一地点をさすとみるべきである。したがって、江口に到着したあとに使節が向かった難波津や客館は、高麗橋説と三津寺町説のいずれでも説明可能であり、これだけでは難波津の位置をつきとめる決め手にはならない。
- ⑤の「難波往古図」は信拠するに足りない偽作図である。日下氏自身も、明らかに間違った部分を含むものもあるので、古地図を安易に用いるのはよくないと述べている通りである。このような図に描かれた「難波湊」の位置は何

の根拠にもならないものである。

⑥ 天神橋付近や高麗橋付近から古代の遺物が多数出土することは、近年までの発掘調査によっても確認されているところであり、このため、近年ではこの付近が古代難波の中心地であるとされ、難波津もこの付近に位置すると考える論者が圧倒的に多くなっている。ただし、三津寺町に近い中央区島之内一丁目の住友銅吹所跡では、下層の七世紀中頃の溝状遺構から祭祀用の舟形木製品一九点や人形・斎串が出土しており、和田萃氏はこれらを千田稔氏の三津寺町説に有利な資料といえると述べている。一九二九年に南海難波駅の地下から古代の土器が出土していることも忘れてはならない。現在までの出土品からみた場合、高麗橋説が相対的に有利であることは認められるが、それは絶対的なものではない。

⑦ 日下氏が依拠したのは『明日香風』所載の吉田靖雄論文である。吉田氏はこの論文において、「文献にみえる七世紀後半の難波の寺は一つしかない。阿曇寺である」とし、高麗橋一丁目の遺跡を阿曇寺とする説が有力であると述べている⁽¹⁵⁾。一方、吉田氏は『大阪府史』第二巻では、「正史にみえる七世紀後半の大阪の寺は、阿曇寺しかない」とし、瓦を出土する寺院跡らしい高麗橋一丁目付近を阿曇寺跡とする説が有力であると説いている⁽¹⁶⁾。しかし、文献にみえる七世紀後半の難波の寺は阿曇寺だけではない。『日本書紀』では白雉四年（六五三）六月条に旻法師を弔った川原寺がみえるが、飛鳥の川原寺が創建されるのは天智朝なので、この川原寺は難波にあつた寺と考えられる⁽¹⁷⁾。また『日本靈異記』上、一四縁には、百濟滅亡後に百濟僧義覚が住した難波の百濟寺がみえる。一方、高麗橋付近に阿曇寺を比定するのは、一九八七年版の大阪府の遺跡地図の見解であつた⁽¹⁸⁾。しかし、この説はその後否定されており、現在は藤沢一夫・梶山彦太郎両氏の説に従つて、北区太融寺付近の字アドエに阿曇寺を比定するのが通説となっている。嘉元四年（一三〇六）の安祥寺鐘銘（『鎌倉遺文』二九、一二二五—一三〇号）に「摂州渡辺安曇寺洪鐘一口」とあるので、安

曇寺は渡辺に所在したことがわかるが、太融寺の南門柱下に奈良時代の礎石が転用されていること、弘安四年（一二八一）の史料に「渡辺太融寺」と記されていることなどから、安曇寺は太融寺の付近に所在していたと結論づけたのである。太融寺説を支える根拠の一つは、明治十九年の「大阪実測図」にみえる字アドエ付近を安曇江の故地とする千田稔説²⁰であるが、小字名に依拠する千田氏の地名考証には、足利健亮氏が指摘するように、古代〜明治間を結ぶ中間項としての地名史料が存在しないという点に大きな難点がある。また、渡辺という地域の中心は現在の天神橋付近なので、七世紀中葉に遡る阿曇寺が渡辺の中心を遠く離れた太融寺付近に創建されたというのも腑に落ちない。したがって、現在の通説である太融寺付近説にも大きな疑問があるが、いずれにしても、阿曇寺を高麗橋付近に求める吉田靖雄説は有効性を失っており、吉田説に依拠する日下説も成り立ちがたいといえる。

⑧日下氏は藪内吉彦説に依拠して、高麗橋という名が朝鮮半島との関係でつけられたことはほぼ間違いないと論じているが、これは藪内説の冒頭だけを紹介したやや恣意的な引用である。藪内氏は高麗橋の名の由来について、「いずれにしても隣国朝鮮との関係で附けられたことには間違いないようである」と述べたのちに、

a 六世紀末に高句麗の使が難波津に上陸し、飛鳥の都へ赴くさいに休養した迎賓館がこの辺にあつたからとする説、

b 天正一八年（一五九〇）、朝鮮（李朝）から国使が秀吉の国内統一を慶賀しに來朝したのを記念して附けられたという説

の二つを紹介したのち、慶長一二年（一六〇七）からはじまる朝鮮（李朝）の通信使との関係は考えられないものであるか、と自説を追加している。高麗橋の名称の由来を古代の対高句麗外交と近世初頭の対朝鮮関係の二つに関わらせて推測する意見は、戦前から唱えられているもので、現在まで根強く継承されているものである。しかし、少な

くともこの二説があることを紹介せずに、「朝鮮半島との関係でつけられた」と要約することで、対高句麗外交や高麗館との関係を暗示させることは穏当ではあるまい。いずれにしても、大阪の高麗橋という名称の起源について、古代説と近世初頭説のいずれにより妥当性があるのかは、辞典や概説書の域を越えて踏み込んで考えてみる必要があると思う。

以上、日下雅義氏の難波津高麗橋説の論拠を検証してきた。①と②については認められるが、七世紀以降の古代にはラグーンは高麗橋付近に限らず、三津寺町などほかの場所にも存在したことが確認されているので、高麗橋付近のみに限定する理由とすることはできない。③④⑤⑦はいずれも根拠薄弱であり、⑧については、高麗橋という名称が近世初頭の対朝鮮関係に関わるものである可能性を検討するという課題が残る。そうなると、残るのは⑥のみである。

⑥は古代遺物の出土状況を重視するものであるが、これについても高麗橋付近のみにとくに顕著な遺跡・遺物が集中するわけではなく、天神橋周辺と読み換えることも可能である。近年、松尾信裕氏は古代の遺物が道修町や平野町から多く出土することから、古代の港湾施設「難波津」は東横堀川分流地点付近の大川岸に存在していたと推定している。²⁴高麗橋説に大きな根拠がないということになると、今後、この説は松尾氏の唱える渡辺津説に包摂して考えることが必要になってくるかもしれない。

二 高麗陣と高麗町・高麗橋・高麗門

高麗橋は大阪市中央区の東横堀川に架かる橋である。豊臣秀吉は天正十一年（一五八三）から大坂城本丸の築城を開始し、同一四年には本丸を圍繞する外堀を掘り、その内側に二の丸を造営した。さらに、文禄三年（一五九四）に

は大坂城惣構の築造を命じた(『駒井日記』文禄三年正月二〇日条)。惣構(惣構堀)とは城の最外郭に築かれる防御施設のこと、大坂城の場合、もともと北・東・西側に存在した河川・堀川を利用し、南側も既存の谷を利用して整備したものである。このとき惣構として東側に東横堀川、南側に空堀が整備されたと考えられている。²⁵⁾

高麗橋の史料上の初見は、『当代記』卷三に、慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の戦い直前の様子を記して、

去七月、上方衆内府公江謀叛時、大坂惣構口々番手事、

一、濱の橋、毛利民部大輔 一、高麗橋、高田河内守
藤懸三河守

一、平野町橋、宮木丹後守 一、淡路町橋、早川主馬

とあるものである。高麗橋はこのときすでに大坂城の西側惣構に架かる橋であったことがわかる。大阪城天守閣には慶長九年八月に大工吉久が奉行した旨の銘を刻んだ高麗橋の鉄製擬宝珠が所蔵されているが、これは大坂夏の陣の直後、焼跡整理の任にあたった徳川方の安藤右京進重長が記念に持ち帰り、長く磐城平藩主安藤家に襲蔵されてきたものと伝えられる。その後、二、三の変遷を経て、吉田茂元首相邸に保管されていることが判明し、沼田頼輔氏が安藤家の家伝によって高麗橋の擬宝珠であったと結論づけたという。²⁶⁾この擬宝珠は昭和四四年(一九六九)に吉田茂の女婿である麻生太賀吉から大阪市に寄贈された。²⁷⁾以上から、高麗橋は大阪城の西側を画する惣構の堀に架かる橋として慶長五年までには築造されていたことがわかる。

高麗橋という名称はこのように大坂城惣構の口として現れるのが最初であり、これ以前には確認することができない。したがって、高麗橋という名称自体はこの頃に成立したものである可能性が高い。これまでに唱えられてきた高麗橋の名前の由来のうち、豊臣秀吉の時期の対朝鮮関係に関わる名称とみる方が妥当性が高いと思われる。

秀吉時代の対朝鮮関係といった場合、まず最初に思い浮かぶのは朝鮮出兵のことである。文禄元年(一五九二)か

ら慶長三年（一五九八）まで足かけ七年にわたった朝鮮出兵は、日本では文禄・慶長の役、朝鮮では壬辰・丁酉倭乱と呼ばれるが、同時代の日本ではこれを高麗陣と称し、朝鮮人のことを高麗人と称した。高麗陣では二、三万人に上る高麗人が日本各地に連行されてきたが、こうした民間人の戦争捕虜を被虜人（被擄人）と呼ぶ。²⁸高麗橋という名の由来を考える際に注目すべきは、この高麗陣と深く関わって高麗町や高麗門という町名・門名が存在することである。

まず、鹿児島には島津義弘が連れ帰った高麗人を居住させた高麗町が存在した。高麗陣の際に、薩摩には金海・熊川・南原・高霊・星州などの地から陶工を含めた多くの高麗人が連行された。「伊集院由緒記」²⁹、「野並苗代川焼物高麗人渡来在附由来記」³¹、朴寿悦本「苗代川由来記」³²などによると、島津義弘は慶長三年の一二月頃に帰国したが、このときに高麗人たちは三派に分かれて鹿児島前之浜・東市来神之川・申木野島平などの海岸に到着した。このうち前之浜に上陸した高麗人を鹿児島の高麗町へ居住させた。高麗町には多人数が召し置かれたために、町立てがなされたという。島平に上陸した高麗人は日本人との間に軋轢を生じたため、慶長八年に苗代川（現、鹿児島県東市来町美山）へ移されるが、その後、寛文九年（一六六九）には高麗町の朝鮮人も苗代川へ移住させられ、ここに薩摩の朝鮮人村落としての苗代川が成立することになる。³³

朝鮮人の苗代川移住後、鹿児島の高麗町之橋の左右、甲突川沿いに一五〇坪前後の土屋敷が造られた³⁴というから、高麗町や高麗町之橋という名称はその後も残されたことがわかる。現在、鹿児島市内の中心部を流れる甲突川には高麗橋など五つの石橋が架けられているが、これは藩が天保十一年（一八四〇）に肥後の石工岩永三五郎を招いて築かせたもので、高麗橋は弘化四年（一八四七）に竣工した。³⁵ただし、高麗人の居住にちなむ高麗町や高麗町之橋という町名・橋名はこれ以前から存在していたのである。島津氏が連れ帰った高麗人（朝鮮人）の集住地を高麗町とし、その付近を流れる甲突川に架けられた橋を高麗町之橋と呼び、やがて高麗橋と略称されるようになったのであろう。高

麗町・高麗橋は今も鹿兒島市内に現存する。

朝鮮出兵後には長崎にも多くの朝鮮人が居住していた。彼らは小西行長・宇喜多秀家らの西国諸將に連行されたのち、海外貿易で潤っていた長崎に流入したものである。⁽³⁶⁾ イエズス会の『日本年報』によると、一五九三年のクリスマスに長崎で一〇〇人の受洗者があり、その過半数が高麗捕虜であった（一五九四・九五年度年報⁽³⁷⁾）。その後、長崎に居住する高麗捕虜の男女子供は一三〇〇名を超え、彼らのほとんどが二年前に洗礼を受けているという（一五九六年度年報⁽³⁸⁾）。長崎の高麗人キリシタンは信心会を組織しており、彼らは寄付金で一六一〇年に高麗町にサン・ロレンソ教会を建てた（一六一〇年度年報⁽³⁹⁾）。長崎に居住する高麗人被虜人は千人を超え、そのほとんどが日本で洗礼を受け、キリシタンとなったのである。⁽⁴⁰⁾

長崎外郭の海岸通りの榎津町周辺には高麗町と呼ばれた被虜人集落があった。長崎が発展し、高麗町を含めた浜町の海岸通りと中島川筋が長崎の中心地に編成されると、高麗町に住んでいた朝鮮人たちは、中島川の高麗橋一帯へと移住した。高麗橋は承応元年（一六五二）に明人の平江府らによって建設されたもので、数回の改修を経て現在に至っている。かつては石橋群の通し番号で第二橋と呼ばれていたが、明治一五年（一八八二）に高麗橋と命名された。高麗橋一帯は一七世紀後半まで新高麗町という地名で呼ばれたが、今は伊勢町と呼ばれている。⁽⁴¹⁾ 長崎の場合も、高麗人の集住地を高麗町・新高麗町と呼んだことがわかる。高麗橋という名称自体は後世に付けられたものであるが、それもかつての新高麗町という町名にちなむものであった。

次に高麗門について述べる。熊本城の西側惣構上の新町南西隅に設けられた出入口として高麗門がある（現、熊本市中央区新町四丁目）。「御大工棟梁善蔵より聞書控」によると、高瀬（現、熊本県玉名市）の大工棟梁善蔵は、加藤清正の高麗出陣にお供し、慶長三年に帰朝したのち、清正の命令によって、彼の地（高麗）の門と同じ形容に高麗門

を造作したという⁽⁴²⁾。熊本城の高麗門は西南戦争で焼失したが、二〇一一年から実施された熊本県教育委員会の発掘調査によって、礎石の下に敷かれた根固め石が確認され、「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦が出土した。慶長四年銘瓦は熊本城内から出土した同種の瓦銘と一致するので、前年までの朝鮮出兵が終了した直後に、加藤清正が進めた熊本城普請の一環として高麗門が建設された事実を示す発掘成果であるといわれる⁽⁴³⁾。県教委の発掘報告書の結論に対しては、美濃口紀子氏が異論を唱えているが、熊本城の高麗門が慶長初期に築造されたという結論自体は、美濃口氏も認めている⁽⁴⁴⁾。

高麗門は近世以降、城門や大名屋敷に多く採用された門形式の一つでもある。近世城郭の出入口である城門は枡形と呼ばれる石垣に囲まれた方形の広場をもち、内側に第一の門を建て、直角に向きを変えて、外側に第二の門を建てた。第一の門を櫓門、第二の門を高麗門と呼ぶ。現存する枡形と高麗門には、江戸城田安門・清水門・外桜田門、金沢城石川門、大阪城大手門などがある⁽⁴⁵⁾。高麗門は薬医門を改良したものである。薬医門は基本構造の鏡柱と控柱をまとめて一つの切妻造の屋根で覆った城門であるが、屋根が大きいため、門の直下に対する視野が遮られ、敵兵に楯として利用されやすかった。高麗門は本体の屋根を冠木の上のみとして、鏡柱の上から控柱の上に別の小屋根を架けたものである。屋根は柱や扉の上のみを覆うため、敵兵が門内に隠れることはできない。高麗門は朝鮮出兵（高麗陣）の頃に開発され、それ以降、急速に普及した。朝鮮半島にはこうした構造の門はないので、朝鮮半島より移入された門とするのは俗説にすぎないという意見もあるが、朝鮮出兵で朝鮮半島へ上陸した日本軍は、各地に日本式の城郭（倭城）を築造しており、その倭城の城門として建てられた最新型の城門が高麗門であるとする説が説得的である⁽⁴⁶⁾。

前述したように、加藤清正が高麗陣に帯同した大工棟梁善蔵が、帰国後に彼の地の門と同形式で熊本城の高麗門を築造したというのは、高麗（朝鮮）で造営された倭城の城門と同じ形式で熊本城の高麗門を建てたことを意味するの

であろう。豊臣秀吉は文禄二年（一五九三）七月、加藤清正ら朝鮮在陣の諸大名に慶尚道南岸一帯に城普請を行うことを指示した。これをうけて清正は西生浦城（現、蔚山市蔚州郡）を築城し、講和条件により一時破却したが、慶長二年（一五九七）にはこれを修復している。この修復普請は艱難を窮めたため、労苦に堪えかねた兵卒が多く逃亡して、朝鮮側に投降したという。また、清正は慶長二年一月から蔚山城の築城もはじめている。いわゆる倭城の一つである西生浦城や蔚山城の築造と修復には、熊本やその周辺から陣夫や職人が動員されたため、大工棟梁善蔵もその一人であったのであろう。善蔵は高麗で西生浦城や蔚山城の造営に腕を揮ったのち、帰国して倭城で採用された最新式の城門と同じ形式で高麗門を築造したと考えられるのである。

以上、鹿兒島の高麗町と高麗町之橋（高麗橋）、長崎の高麗町と新高麗町・高麗橋、熊本城惣構南西端の高麗門などの由来について述べてきた。鹿兒島の高麗町は慶長三年に島津氏が高麗陣から連れ帰った高麗人（朝鮮人）が居住したところから生まれ、長崎の高麗町も同様の由緒をもつ。長崎の高麗橋は後世に名づけられたものであるが、鹿兒島の高麗町之橋という名称からもわかるように、高麗町あるいは新高麗町に架けられた橋という意味では、高麗橋という名称もまた高麗人の居住地に深く関わるものであったといえよう。一方、熊本の高麗門は加藤清正が高麗陣に連れていった大工棟梁が、慶長三年の帰国後に高麗で建てられた倭城の城門と同じ形式で築造したものである。高麗町・高麗門のいずれにも共通するのは、高麗陣で出兵した島津義弘や加藤清正が彼の地から高麗人を連れ帰ったり、彼の地の城門形式を日本に持ち込んだりしたことに由来することである。高麗町・高麗橋・高麗門という名称の背景には、豊臣秀吉の朝鮮出兵で日本に移入されたヒト・モノに関わるという共通項を読み取ることができる。

大坂城の西側惣構の堀に架かる高麗橋は、熊本城の西側惣構の南端に位置する高麗門と、西側惣構上に配置されるという点で共通点を有している。高麗橋は江戸時代には幕府が架橋した公儀橋の一つで、西詰に高札場があり、東詰

には里程元標があつた。大坂城と船場城下町を結ぶもつとも重要な橋で、上町の島町通りから高麗橋通りへ延びる道は、豊臣時代においても初期城下町の基準線として注目されている⁽⁴⁹⁾。一方、熊本の高麗門は西側惣構と一体の重要な防御施設であるとともに、高麗門外横手寺町に建ち並ぶ禅定寺・妙永寺・本覚寺など藩主一族や重臣の菩提寺へ至る参道の起点でもあつた⁽⁵⁰⁾。大坂城の高麗橋は高麗人の居住した高麗町によるものというよりは、倭城の城門を移植した高麗門に関わるものである可能性が高いと思われる。たとえば高麗門の前に架けられた橋であつたから高麗橋と称したという可能性である。いずれにしても、大坂城が朝鮮出兵を命じた秀吉の居城であつた以上、高麗橋の名称が高麗陣に関わるものである可能性はきわめて高いとみるべきであらう。

前述したように、大坂城惣構上の高麗橋の名の起りについては、六世紀末に來朝した高句麗使の迎賓館（高麗館）に関わるといふ説と、一六世紀末あるいは一七世紀初頭に來朝した朝鮮使節に関わるといふ説が唱えられてきたが、高麗橋という名称の初見が一六世紀末である以上、前者の高句麗使の迎賓館説が成立する余地は乏しい。また、後者の朝鮮使節説は一六世紀末に注目する点では評価できるが、当時の厳しい日朝関係の真相を踏まえた説とはみなしがたい。鹿児島の高麗町・高麗町之橋（高麗橋）、長崎の高麗町・新高麗町・高麗橋、熊本の高麗門などの由来を参照すると、大坂城の高麗橋も朝鮮出兵時のヒトヤモノの移入に関わる名称であると考えるのが穩当である。

いずれにしても、大阪に残る高麗橋という名称が六・七世紀の高句麗や高麗館に由来する可能性はきわめて低く、高麗橋という名称を根拠に、この付近に古代の難波津を比定する日下雅義説には大きな問題があるといえよう。

おわりに

以上、難波津を高麗橋付近に比定する日下雅義説の論拠について再検討を加え、いまや日下説は成立困難であるこ

とを論じてきた。これまでに述べてきたところを要約すると、以下のようになる。

日下説の論拠は以下の八点である。①難波津など古代の港はラグーンに成立することが多い。②高麗橋付近にラグーンの存在を示すシルト層が確認されている。③仁徳紀二二年条の「難波の崎の 並び浜」は砂州とラグーンの連続する様子を歌ったものである。④推古紀一六年条や舒明紀四年条の記事は隋使・唐使が堂島川沿岸の江口から堀江に入り、高麗橋付近の難波津へ進んだことを示す。⑤「難波往古図」では高麗橋の位置に「難波湊」が描かれている。⑥高麗橋付近から古代の遺物が多く出土する。⑦七世紀後半の難波で唯一の寺であった阿曇寺は高麗橋付近に建立された。⑧高麗橋という名は朝鮮半島との関係でつけられた。このうち①②に異論はないが、近年の古地理復原では七世紀以降の古代には三津寺町付近にもラグーンの存在したことが想定されているので、①②はいまや高麗橋説にのみ有利な証拠ではなくなっている。

③の「並び浜」は砂州と水域が交互に配列する情景を示すとは必ずしも言い切れず、また近年では恵美須町遺跡でも「並び浜」を思わせる海浜の地層が検出されている。④の両記事にみえる江口は淀川河口付近の海上の一点をさすと考えるべきなので、江口から誘導された先の難波津や客館は三津寺町付近に位置したとみることもできる。⑤の「難波往古図」は偽作図なので、そこに描かれた「難波湊」の位置も信用できない。⑥古代の遺物が多数出土するのは天神橋付近までを含めた広範囲からなので、とくに高麗橋付近のみに注目する必要はない。⑦阿曇寺を高麗橋付近に求める説はその後否定され、現在では北区太融寺付近に比定されるようになっていく。阿曇寺が七世紀後半の難波で唯一の寺であったというのも正しくない。⑧高麗橋という名が古代の対高句麗外交によるのか、近世初頭の対朝鮮外交に由来するののかは、改めて踏み込んで考えてみる必要がある。

このように、日下説の論拠の多くは現在では成立困難になっており、高麗橋の名前の由来如何によっては、その前

提がすべて崩れることになる。高麗橋は大坂城の西側惣構の堀に架かる橋で、その史料の初見は慶長五年（一六〇〇）である。大阪の高麗橋という名称と類似するものとして、鹿兒島の高麗町・高麗町之橋（高麗橋）、長崎の高麗町・新高麗町・高麗橋、熊本の高麗門がある。鹿兒島と長崎の高麗町は、豊臣秀吉の朝鮮出兵（高麗陣）の際に、島津氏などが連行してきた被虜人たる高麗人（朝鮮人）の集住地をさし、のちにこの地に架けられた橋を高麗橋と称した。また、熊本城の西側惣構上の南端には高麗橋が築かれたが、これは加藤清正の高麗出陣に同行した大工棟梁善蔵が慶長三年の帰国後に、高麗に築造した倭城の城門にならって造作したものである。大坂城の高麗橋は西側惣構上にある点で、熊本城の高麗門と共通しており、高麗橋が高麗門と関わって架けられた橋である可能性を示唆する。

いずれにしても、大阪の高麗橋という名称が古代の対高句麗外交と関わる可能性はきわめて低く、大坂城が朝鮮出兵を命じた豊臣氏の居城であった以上、高麗橋という名称も高麗陣に由来するものと考えの方が穏当であろう。日下氏の高麗橋説はとくに⑥⑦⑧の根拠を重視して構築されているが、⑦⑧の根拠が崩れるとなると、高麗橋付近にとくに固執する必要はなくなる。⑥の根拠はいまなお有効であるが、前述したように、松尾信裕氏は発掘成果を精査して、東横堀川分流点付近の大川岸に難波津を比定している。松尾氏の想定する難波津の範囲内には高麗橋付近も入っているため、高麗橋説は今後この松尾説（渡辺津説）のなかに包摂して検討されるべきであろう。

私は別稿において難波津の歴史の変遷を検討した結果、五〜六世紀の難波津は淀川河口部の天神橋（渡辺津）付近に位置したが、七世紀以降、淀川河口部が西進するにしたがって、難波津は三津寺町付近に移されたという結論を得た^⑩。高麗橋付近は天神橋付近に包摂されるので、五〜六世紀にはこの付近に難波津が所在した可能性は残るが、七世紀以降は大型の外航船がここまで遡上してくるのは困難になったであろう。古代難波津が置かれた場所として高麗橋という地域にとくに注目する必要性は薄れてきたといえるのではなからうか。

注

- (1) 平野卓治「日本古代の客館に関する一考察」(『国学院雑誌』八九一三、一九八八年) 四六頁、西本昌弘「改新政府と難波大郡宮・小郡宮」(『日本書紀研究』三〇、塙書房、二〇一六年) 二五六頁。
- (2) 日下雅義「古代景観の復元」(中央公論社、一九九一年)。その後、『地形からみた歴史―古代景観を復原する』(講談社、二〇一二年)と改題して文庫化されている。
- (3) 直木孝次郎「難波の柏の渡りについて」(『難波宮と難波津の研究』吉川弘文館、一九九四年)。
- (4) 千田稔「古代港津の歴史地理学的考察」(『史林』五三一、一九七〇年)、同「埋れた港」(学生社、一九七四年)。
- (5) 直木孝次郎注(3)論文、同「難波津と住吉津」(『明日香風』二六、一九八八年)、同「難波津と難波の堀江」(『難波宮と難波津の研究』吉川弘文館、一九九四年)。
- (6) 木原克司「古代難波地域周辺の景観復原に関する諸問題」(『大阪の歴史』四八、一九九六年) 九頁、一五頁。
- (7) 『大阪の歴史』三〇(一九九〇年)の座談会「古代難波の景観復元とその変遷」一〇三頁における足利健亮氏の発言。
- (8) 趙哲済・中条武司「難波のささの並び浜」(『葦火』一五九、二〇一二年)、趙哲済・市川創・高橋工ほか「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」(平成二一～二五年度科学研究費補助金基盤研究(A)『大阪上町台地の総合的研究』研究代表者脇田修、二〇一四年) 一六頁。
- (9) 西本昌弘「難波江口考」(辻尾榮一氏古稀記念論叢刊行会編『歴史・民族・考古学論攷』(I)、二〇一九年)。
- (10) 喜田貞吉「難波沿革図の偽作」(『歴史地理』二一七、一九〇〇年)、同「偽作難波図の害毒」(『歴史地理』三一五、一九〇一年)、山根徳太郎「難波王朝」(学生社、一九六九年) 一六五頁。
- (11) 日下雅義注(2)著書二二八頁。
- (12) 大阪市文化財協会「住友銅吹所跡発掘調査報告」(一九九八年)。
- (13) 和田萃「古代難波の景観」(『文学』一一五、二〇〇〇年) 一九一頁。
- (14) 八木博「難波堀江の研究」(『好古趣味』二、一九三〇年) 八五頁、瀧川政次郎「明治十八年の淀川大洪水と上代の難波」(『史迹と美術』二七三、一九五七年) 一六八頁。
- (15) 吉田靖雄「難波の寺々―四天王寺を中心に―」(『明日香風』二六、一九八八年) 三九頁。

- (16) 吉田靖雄「白鳳時代の寺々」(『大阪府史』第二卷、一九九〇年)二〇〇頁。
- (17) 西本昌弘「川原寺の古代史と伽藍・仏像」(『飛鳥・藤原と古代王権』同成社、二〇一四年)六三頁。
- (18) 文化庁『全国遺跡地図』大阪府(一九八七年)一八頁は、安曇寺跡を大阪市東区今橋二丁目に比定している。
- (19) 藤沢一夫・梶山彦太郎「阿曇寺跡と渡辺別所」(『大阪市文化財年報』昭和六一年度、一九八七年)。
- (20) 千田稔注(4)論文七一頁。
- (21) 足利健亮「摂河泉(大阪府下)の古代港津」(考証・日本古代の空間)大明堂、一九九五年)一七一頁、注(7)座談会一〇一頁における足利氏の発言。
- (22) 藪内吉彦「高麗橋今昔」(『大阪春秋』一九、一九七九年)一一二～一一三頁。
- (23) 高麗橋の名称を古代の高麗館に結びつけて論じたのは、暁鐘成「撰津名所図会大成」(安政年間(一八五五年頃)刊)が最初で、卷一三上の高麗橋条に「伝云、往古の高麗館の古址此橋の東に有を以て名づく」とある。その後、『東区史』第三卷(一九四一年)はこの高麗館説を引用しつつ、秀吉が東横堀を開鑿し、本橋を架設した当時、この橋を中心に高麗との貿易が旺盛であったため、これによって名づけたとの説を併記している(九八三～九八四頁)。高麗橋の由来を古代の対高麗外交と近世初頭の対朝鮮関係の二つに関係させて論じるのは通説化しており、近年まで多くの図書に同様のことが祖述されている。宮本又次「船場」(ミネルヴァ書房、一九六〇年)一一九頁、大阪町名研究会編『大阪の町名』(清文堂、一九七七年)一三三頁、角川日本地名大辞典「大阪府」(角川書店、一九八三年)四七三頁、三善貞司編『大阪史蹟辞典』(清文堂、一九八六年)一九〇頁、松村博「大阪の橋」(松籟社、一九八七年)一七八頁、豆谷浩之「高麗橋」(『大阪の地名由来辞典』東京堂出版、二〇一〇年)一四三頁など。
- (24) 松尾信裕「大坂城下町跡とその周辺の歴史的環境」(大阪市文化財協会「大坂城下町跡」Ⅱ、二〇〇四年)一〇頁、同「大坂城下町跡下層の遺跡」(同上書所収)三五三頁、同「古代難波の地形環境と難波津」(中尾芳治・栄原永遠男編『難波宮と都城制』吉川弘文館、二〇一四年)三三三～三六頁。
- (25) 『新修大阪府史』第三卷(一九八九年)四六～四七頁、大澤研一「文献史料からみた豊臣大坂城の空閑構造」(大阪市立大学豊臣大坂研究会編『秀吉と大坂 城と城下町』和泉書院、二〇一五年)六二～六三頁、中村博司「大坂城全史」(筑摩書房、二〇一八年)一六五～一六七頁。
- (26) 松村博注(23)著書一七九頁。

- (27) 大坂城天守閣編『大坂城天守閣所蔵品図録』(大阪観光協会、一九七五年)一五二頁、伊藤純「高麗橋」(『大阪の橋ものがたり』創元社、二〇一〇年)八六頁。
- (28) 内藤雋輔『文祿慶長の役に於ける被擄人の研究』(東京大学出版会、一九七六年)二一六頁。
- (29) 井上和枝「朝鮮人村落「苗代川」の日本化と解体」(久留島浩ほか編『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』岩波書店、二〇一四年)一九三頁、尹裕淑「近世初、西日本地域の「朝鮮人集団居住地」について」(『近代朝鮮の境界を越えた人びと』日本経済評論社、二〇一九年)三五頁。
- (30) 鹿児島県史料拾遺刊行会「鹿児島県史料拾遺」XV(一九七四年)所収、五二〜五三頁。
- (31) 宮本常一ほか編『日本庶民生活史料集成』一〇(三一書房、一九七〇年)所収、六七五〜六七七頁。
- (32) 大武進『薩摩苗代川新考』(大武進、一九九六年)所収、一五七〜一五九頁。
- (33) 有馬美智子「薩摩藩に於ける対朝鮮人政策」(『史艸』四、一九六一年)三二〜三三頁、原口虎雄「立野並苗代川焼物高麗人渡来在附由来記・苗代川文書所役日記解題」(注(31)編著所収)六七三〜六七四頁、井上和枝「苗代川「朝鮮人」の姓氏に関する歴史的考察」(『国際文化学部論集』八一三、二〇〇八年)二二〇〜二二五頁、同注(29)論文一九三〜一九四頁。
- (34) 日本歴史地名大系「鹿児島県の地名」(平凡社、一九九八年)高麗町項。
- (35) 『鹿児島市史』I(一九六九年)三八三頁、阿久根芳徳ほか「薩摩藩城下に架けた高麗橋の構造」(『土木史研究』一六、一九九六年)二二七頁。
- (36) 中村質「壬辰丁酉倭乱と被虜人」(『近世対外交渉史論』吉川弘文館、二〇〇〇年)。
- (37) 五野井隆史「被虜朝鮮人とキリスト教」(『東京大学史料編纂所紀要』一三、二〇〇三年)五一頁。
- (38) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第一期第二卷(同朋舎出版、一九八七年)二〇一頁。
- (39) 中村質注(36)論文五二頁、五野井隆史注(37)論文五二頁、同「慈悲の組とキリシタン」(『キリシタン信仰史の研究』吉川弘文館、二〇一七年)二二五頁。
- (40) 中村質注(36)論文、尹裕淑注(29)論文二四〜二五頁、長森美信「壬辰・丁酉(文祿・慶長)乱における朝鮮人被擄人の日本定住」(『天理大学学報』七一―二、二〇二〇年)一〜三頁。
- (41) 嘉村国男「長崎町尽し」(長崎文献社、一九八六年)八六〜八九頁、尹達世「四百年の長い旅」(リール出版、二〇〇三年)一

三八頁、角川日本地名大辞典『長崎県』（角川書店、一九八七年）伊勢町・高麗橋・本鍛冶屋町項、日本歴史地名大系『長崎県の地名』（平凡社、二〇〇一年）高麗橋・本鍛冶屋町項。

(42) 『熊本城今昔記』（熊本市役所観光課、一九六三年）四〇頁、北野隆「建築学的に見た高麗門」（熊本県教育委員会編『熊本城遺跡跡群』二〇一四年）三七頁。

(43) 稲葉継陽「文献史料からみた熊本城の惣構と高麗門」（前掲『熊本城遺跡跡群』所収）三八〇頁。

(44) 美濃口紀子「特別史跡熊本城「高麗門・御成道跡」の再検証」（『熊本歴史叢』二〇、二〇一九年）。

(45) 菊池康夫「高麗門の建築について」（『岐阜女子大学紀要』一五、一九八六年）、中井均「名城の条件 城門編 其の二 高麗門・薬医門・埋門」（『歴史読本』二〇一三年一月号）。

(46) 中井均注(45)論文三〇二～三〇三頁。

(47) 三浦正幸『城のつくり方図典』（小学館、二〇〇五年）一四八頁、広島大学文化財学研究室編『すぐわかる日本の城』（東京美術、二〇〇九年）九二頁。

(48) 北島万次『加藤清正 朝鮮侵略の実像』（吉川弘文館、二〇〇七年）八〇～八八頁、一四二～一四五頁。

(49) 宮本雅明「京・大坂の景観演出」（『図集日本都市史』東京大学出版会、一九九三年）、松尾信裕「近世大坂の発掘調査と地域史研究」（『日本史研究』六九〇、二〇〇五年）九〇頁、豆谷浩之・南秀雄「豊臣時代の大坂城下町」（前掲『秀吉と大坂 城と城下町』二四三～二四五頁）。

(50) 稲葉継陽注(43)論文三八〇頁、美濃口紀子注(44)論文六〇～六一頁。

(51) 西本昌弘「古代難波津の歴史の変遷―難波御津（大津）から難波三津（御津）へ―」（投稿中）。

〔謝辞〕本研究はJSPS科研費20K00969の助成を受けたものです。